

[2] 全体概況

試験時間 60分

大問数・解答数	大問数：4題	解答数：36問
問題の分量（対昨年比）	○ 多い	● ほぼ同じ ○ 少ない
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	● あり	○ なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p>総評</p> <p>例年通り、テーマ史らしいリード文を用いながら広い範囲の小問を集めた形式をとっている。大問4題・解答数36という出題の分量は昨年と同じである。今年度は西欧史の割合が少し増加したが、全体としては各範囲をバランスよく問うものとなった。その中で出題形式の比率に関しては多少変化が見られ、ここ2年は出題がなかった年代整序問題が3題出されており、例年大部分を占める正誤判定問題については、ここ数年で増加傾向にあった2文の正誤組み合わせ問題が6題に増加している。その一方で地図問題は1題にとどまり、それも都市の位置を問うものではなく勢力範囲と王朝名の組み合わせ型であった。一方出題範囲では、第二次世界大戦後の現代史の事項はまとまった大問になっていないものの、各小問の選択肢に入れられている。また近年頻出の範囲であった東南アジア史は、今年は出題されなかった。</p>		

[3] 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	メディアと世界史	25点	3問の年代整序問題のうち2題が入っている。全体としては幅広い範囲を扱った問題の集合体であるが、実際に19世紀の情報革命を扱った問題も入っており、近年の入試問題の傾向をうかがわせるが、特に難易度の高い問題は見受けられない。
第2問	宗教と世界史	25点	幅広い範囲設定・出題形式の多様さ・正誤のポイントの難易度など、センター試験らしい非常にオーソドックスな大問である。その中で、文化や宗教に関しても正誤判定問題で扱っている点も例年通り。
第3問	世界史上の暦	25点	第1問・第2問と比較すると、聖書の扱いや選挙法改正(英)の内容・中ソ論争の時期など、難問ではないが表面上だけではなく確かな理解や流れの把握を求める問題が含まれるため、得点差がつきやすいと思われる。
第4問	世界史上の異文化接触	25点	他の3問と比較してアジア・イスラーム関連の出題比率が高い大問となっている。その中で、2文の正誤組み合わせ問題の中で確かな理解を要求する問題が含まれ、また4文から選択する正誤判定問題でもセンター試験としては難易度のやや高いものが含まれる。